



# 『新学習指導要領の理念と課題』

兵庫教育大学学長・松江松徳学院理事長 梶田 叡一

今日、お話しするのは、新学習指導要領を作成するとき、どのような考えをもとに、作成してきたか、ということである。

今回の新指導要領も間違った解釈がいっぱいある。「ゆとり」か「詰め込みか」という二者選択もそうである。どちらでもない。極端な話し、ゆとりも、詰め込みも両方教育ではない。また、反復練習とも言っていない。

基本になるのは、「習得・活用・探求」である。「一つの基本、三つの大切」である。念を押したいことは、「言葉」を大切にすることである。また「理数系」を大切にすることである。理数系の学力が低くなっている。それは、頑張って勉強するという癖がついてない。一つ一つわかっているためには、しんどいことや、おもしろくないことでもしないといけない。好きなことを好きな時に好きにだけやるだけでは学力はつかない。どうにもならない。理数系は、一つ一つシステムチックにわかっている癖がつかないとわかっていかないからである。

二番目の大切なのは、「伝統文化」である。私自身の著書「和魂ルネッサンス」という本がある。これは、いつのまにか教師であろうが、知識人であろうが、日本の伝統文化を知らなくなつたという内容である。たとえば、ディーイーは勉強した。でも本居宣長の「宇比山踏（ういやまぶみ）」という簡単な勉強の仕方の本は読んでないでしよう。例えば、いつ勉強を始めたらいのか。つまり若い時でないといけないのかと問うている。本居は、思い立ったら始めようと記載している。また、自分に才能があるかどうか、あるいは勉強の仕方がどうか問うている。そして、大事なものは、しがみついて勉強することだと記載している。勉強することは、才能の有無に

関わらず、積み上げていくものだと言っている。

私は、中教審の副会長になつてから、多くの人々と仕事をしてきた。二〇〇〇年代から取り組んだ中教審の内容を三年間でまとめる仕事をしてきた。あるとき、私は、ふと才能があるなしは関係ないと思えることがあつた。私は、自分に才能があるとは思っていない。ある種の才能はあるとは思っていない。ある種のかは、わからない。結局、才能があるかどうかは、わからない。結局、才能があるかどうかを語るのには、お通夜の席になつてしまふと思つている。生涯を通じて、良い仕事ができるとき、他者の評価として、あときのユニークさ、影響力はすごかつたと言つてもらえる。そして、きつと才能があつたんだと語り継がれるであろう。私は、本居宣長はいいこと言つていふと思う。才能の有無なんて考えたら、学問や勉強なんてできっこない。歳とつてからでも、「よし、勉強するぞ」と思つて始めてれば、そのうち物になりませう。例えば、生涯学習の時代だし、才能にこだわれば、才能があれば、慢心してダメになるし、才能がないと思えば、絶望してダメになる。

勉強して「独」自分がただ一人この世に存在することがわかる。大事なものは、自分で感じるかどうかである。「わかつた」かが大切になる。中江藤樹もいつている。私は若いときから、一人の子どもの後ろにある世界に問いかける。多くの研究授業も見てきた。その中で、口先だけがうまくなり、友達を中傷する発言をよく見かけた。小学校でも、活発な話し合いをしている光景を見てきた。しかし、それは、賢くなつたかと言つて口先だけが上手になつただけの場合も多い。勉強することが授業を見学にきている人た

ちに見せることになつてはいけない。学びというのは、顔の後ろで起る。九十年代によく言われた「子どもたちの顔がきらきらしている」というフレーズ。もちろん、どんなよりして良いというわけではないけど、おもしろい話をすれば目はキラキラする。問題なのは、本時の課題が「わかつたかどうかが、キラキラとは違うことを教師がわかっていることである。

利休の時代は、舶来の磁器を使うのが一流の茶人であつた。しかし、利休は、ある意味、常識を覆した。それは、利休が使つたのは、楽とか志野といった陶器である。利休は、日本製を使つたのだ。陶器と磁器の世界は違ふ。利休は、陶器が良いと思つて使うわけである。だから利休が豊臣秀吉から師を賜つたとき、安物の道具を高く売りつけた。当時、高い物でなくて、いろんな道具を集めてきた。それらは利休の目利きが入つてのことで、譲つてほしいと言われる。しかも黄金何枚で譲つてほしいと言われた。利休のおかげで陶器の価値が高まつた。しかし利休は、安いから陶器を使うのではなく、この方が利休が考える侘び茶の理念、感覚に合致したから使つたのである。こういう日本の伝統を子どもたちからわからせたい。

岡倉天心が本の中に書いていふが、フランス庭園の作り方と日本庭園の作り方は作方方が全然違ふ。日本庭園は視点が分散している。フランス庭園はトータルポイントがあつて、ある所から全部を見渡せる。そして幾何学的に綺麗に整備されている。金閣の庭園も三メートルずれると、違う構図になつてくる。常に視点が分散している。しかし常にその時その時で全く新しい調和の世界ができあがつている。つまり、ものには見方があるのだ。庭園を見るときにフランス庭園と日本庭園を同じ気持ちでみるのではなく、見方のさわりぐらいい知つてほしい、小中学校から見方のさわりぐらいい知つてほしいと考へている。日本の伝統文化は、六

十年代におろそかにされた。日本が六年くらい主権を失つていた頃、日本の古いものは軍国主義につながると言われ、排除される傾向にあつた。

日本のことを学ぶことによつて、人類社会がもつてきた文化を複眼思考で見る目を養いたい。日本列島の中での伝統文化を学ぶことによつて、フランスの文化やドイツの文化も見えるようになる。対比できるようなことになることは重要である。教育基本法の中でも「伝統文化を大事にし、それを国際社会的な社会の中で生かしていく」といつている。「理数」と「伝統文化」である。そして、「英語」である。アジアで一番英語ができたのは、タイと日本だつた。それは、アジアで唯一植民地にならなかつたのは、日本とタイだけだつたからである。そのタイでさえ、今英語を小学校一年二年からやっています。もつと言えば、フランスやスペインは英語が嫌いだつたけど、当たり前ですよ。今の英語の言語は、骨組みはゲルマン、ボケブラリーはフランス語だからです。ずっとイギリスの上流階級はフランス語が公用語だつた。ラテン語の系統をひくフランス語やスペイン語から見ると、英語は俗語なんです。ゲルマン系とラテン系の俗語としてきた。しかし、そのフランスでさえ、英語を今は小学校からやっている。中国もです。韓国なら学校の先生も英語で話してくれませう。

日本は子どもも先生も話すことが苦手である。今や英語は共通語にな



っている。私達が世界を回って、現地の言葉をそれぞれ覚えるのは大変である。中国語……でも英語だけ知っていれば通じる。こういう時代である。つまりいい悪いは別として、共通語になっている。これからの国際社会の中で生きる生徒にとつては、必要な言葉である。小学校から英語を始めることは、重要なことである。現行から、さらには小学三年生から始めたいと思つてゐる。しかし、ALTと先生がある程度話せないといふ五・六年生に定着させるのも難しいかもしれない。がんばつてほしい。言葉の力、理数系の力、伝統文化の力を話してきた。一つの基本と三つの大切を話してきました。

いつも言いますけど、この裏にある考えが必要である。三十年ぶりに学習指導要領の分量が増えて、レベルが高くなり、二十年ぶりに、もう一度バランスのとれた教育にしようという教育姿勢の転換を試みた。九十年前後「子ども中心、好きなことを好きな時に好きなように」とか、知識・理解のウエイトを軽くし、それよりも関心・意欲・態度に重きをおこう。あるいは、めだかの学校にしよう」と言つてきた。文部省にも責任がないことはない。授業だつて、昔は出と入りを大事にしてきた。教師は責任をもつて発問をする、指示をする、教材提示をする、説明をする、これが出です。入りは、どこかで子どもたちに課題意識をもたせ、追求・探求させる。自力解決させる場を作らないといけない。

教育は開く面が必要であり、子どもたちの心を開く、課題の世界を開くことである。同時に示すことが大切であり、「これはこうだよ」、「あればあんだよ」と師匠が教える。そして、学習者に任せて、課題を追求して、自分で「ああそうなんだ」と納得する。最後に、先生の力と生徒の力が相まって、さらなる追求への意欲をもち始めることとなる。当たり前のことであるが、最後は先生が責任をもつ。しかし、関わり方としては出と入りがある。この組み合わせを考えることが

授業設計である。ところが、子どもを信頼してやらせたいという、過去、とんでもないことになつた学校現場がある。

だから、ゆとりでもないし、詰め込みでもない。もう一度考えないといけないことは、学校とは何か。教師とはどのような存在か。学校は多様な体験をするところではない。勉強して賢くなる場所である。賢くなることは一人では難しい。特にシステムチックで積み上げていくことは難しい。だからこそ、指導のプロとして、プロの教師がいる。そのプロの教師がいなくて学校といえない。でも九十年代からきれいごとを言つてきたので、世間の人が「あのくらいなら私達でもできるよね」と言い出した。それが、今の教師や学校につながつてきた。教育再生会議は、今の先生を追い出して、企業から良い先生を連れてきたら、学校はよくなるよと言つてきた。もともと教師の免許更新制度もここからスタートした。十年に一回適応できない先生に、勉強してもらつたために、更新講習をした。現場には百万人も教師いるので適応できない人もいる。公平公正に一年間研修を受けてもらい公平公正に見極めていく。そして、適応できなければ、教壇を降りてもらふ。十年に一度くらい勉強してもらふ。今の教師が信頼・尊敬されていなくて、九十年代から子どもを信頼して、子どもの目がキラキラしているだけで良いと思つてきたからである。

そして、とても悪くなつたのは、教材研究である。詩や短歌の鑑賞も、子どもに任せてしまえば、ただの感想で終わつてしまう場合が多くなる。つまり、鑑賞できない場合が多くなる。先生が教材研究をしない生徒の感想だけで終わり、深まりがない。昔は、すぐく教材研究をしてきた。子ども中心でよいと思つている教師は教壇を降りなければいけない。やはり教師は子どもがわかつていないところまで勉強しておかないといけない。少なくとも八十年代までは教材研

究に力を入れてきた。もう一度、教材研究の必要性や重要性を確認してもらいたい。今日の指導要領の話は、やはり日本の教育をもう一度昔に戻した。あるいは、もう一度昔の学校や教師に戻した。一時的なゆるみやたるみを超えて、プロが教え、子どもに学習内容を教えて賢くなる時がきたと考へてください。先生は、教材研究しないといけない。学校の先生は勉強しないといけないことを伝えてほしい。ご静聴、ありがとうございます。

## グループ研究にこだわつて

### 兵教大の研究は「今」

斐川西中学校 岡田 昭彦

※指導・助言 兵庫教育大学准教授

天根 哲治

兵教大の修士論文は「社会科の授業過程における小集団相互作用が生徒の知識構造の変容に及ぼす影響」であった。そして、小集団相互作用の質を高め学力向上をねらう、また四人全員で話し合いを行うために工夫をするというスタンスは、現場から見ると、とてもよい研究であつたと感じ、天根先生にアドバイスを受けながら、現場でも続けて研究をし、今回松江大会で発表させてもらった。

コミュニケーションが原因の一つで別の問題を抱える生徒が、何人も出現している。教室には、教師と生徒しかいない。そこで、困難や問題を抱えている生徒に学力をつけたり、集団行動がとれるようになるには、生徒どうしの関わりが大切と考え、実践に踏み切つた。

\*天根哲治先生の指導・助言

私の問題に対して、次のような指導・助言を頂きました。

#### ★教師の研究のサポート

一人の研究ではなく、本当に研究したい内容を多くの人と研究すること。その際に兵庫教育大学も現場とタイアップして、応援していきたいと心強い言葉を頂きました。

#### ★ネバーギブアップの精神

①自己効力感のある先生、②学習や支え合いに肯定的な雰囲気のある学級、③困難を抱えている生徒への肯定的対応などが大きく問題に関係していると指導頂きました。そして、いかに学級や話し合いを形成していけば良いか資料を中心に具体的に助言して頂きました。

#### ★実践について

現場では、様々な実践を行っています。常に反省をし、課題を見つけ、そして対応していく姿勢を示してほしいと指導頂きました。

#### ★心理学的な知識

「実践と理論は、とても大切です。理論的な面と実践とのすれ違いはある。しかし、理論を勉強しなければ、課題が見えにくいし、対応も経験知のみになつてしまふ。心理学の勉強も引き続き行つてほしいと助言を頂きました。

最後に、実践発表は、いつもサクセスストーリーが多いが、そこに至るまでに、いくつもの失敗事例もあると思う。うまくいかなかつた事例をあげて、皆さんで考えることも、必要であると助言を頂きました。



# 兵教大大学院同窓会 「御退職を記念する会」

平成二十一年六月六日(土)に松江ニューアールホテルを会場に御退職を記念する会を行いました。

佐堂先生は、益田ブロック長をリードして頂き、同窓会を盛り上げて頂きました。先生は、昭和五十五年四月二十三日に第一回大学院入学されました。当日は、当時の社の町並みや熱く語り合った大学院時代の研究について、楽しく語って頂きました。私達は、先生とお話して、元気をもらいました。今後とも教育、そして同窓会にも参加して頂き、御指導、御鞭撻をよろしく願いますと、なごやかな会になりました。



## シリーズ3『あれから』

(第一期修了生) 佐堂 正義

### ★情報のネットワーク化こそ急務

昭和五十五年の四月、嬉野台に兵庫教育大学(大学院)が開校した。当時は、言語・社会系棟と食堂・売店、それに世帯寮と単身寮が各一棟であった。一面赤土の台地で、雨の日には赤い泥土を含む水が至る所に流れ出し、長靴を履いて登校する有り様であった。世帯寮から真向かいに単身寮が見え、その明かりを気に掛けながら、「負けてはいけない」と頑張ったものだ。夜がふけると、狐の鳴き声を聞くこともあった。

入学早々、S教授のオリエンテーションで、千枚を超える分厚い修士論文を示しながら、「君達はこの論文を書くために入学したのだ」と公言され、強い精神的ショックを感じたものである。以来研究が進むに比例

して、地元の酒屋「きしくま」の焼酎の売上が伸びたということを知っている。

当時、指導要録が改訂され、昭和五十五年度から観点別学習状況評価で、社会科においては「社会的事象に対する関心・態度」を絶対評価することになった。このことに関心をもち、「社会科教育における態度の育成と評価」を研究主題に掲げて取り組んだ。

二年間の取組の結論は、「態度の育成は知性と情意の結合によって可能である」ということである。知的発達を中軸にして、それに子どもの感情を喚起するための教授・学習活動を展開することによって、子どもは社会的事象を客観的に理解するだけではなく、社会的事象を自己の立場に引き寄せ、「なるほど」という情意の層に至る全心的理解(自己理解)をすることができた。この理解は単に社会的事象に対する静的な理解に止まらず、子どもの行動に方向とエネルギーを供給する動的な理解であり、ここに態度は育成されると考えた。

この理論を現場に持ち帰り、実践を試みてきた。実践の根底に理論を持つていることは、非常に心強いことである。実践に行き詰まったときは、いつも元の理論に立ち返って考え直すことができた。

あるとき、鮎掛けと態度について考えたことがある。鮎掛けが好きになるためには、まず鮎掛けの仕方を知ること(認知)、知ればやってみたくなる(行動)。

次に、行動すれば何らかの感動体験が生まれてくる。その感動(情意面)が次ぎの行動への原動力となり、「認知→行動→感動」が継続する。しかし、その行動には苦勞や苦痛、悔しさはつきものであり、自問自答し、新たな夢に向かってその試練を乗り越えていかなければならない。このような継続の過程で、上達への満足感をもとより、「不屈の精神」や「向上心」、「創造性」などを自ら確認し、それが「確実な自信や信念」となり、自己の行動を方向付ける力、すなわち態度が育成される。

同窓会員一人一人は、かけがえない研究成果を持つている。このことは個人の成

果に止まらず、貴重な島根の教育財産であると考えている。この情報が個人に埋没することなく、会員相互、さらには広く教育界に浸透していくことは、島根の教育界の発展に大きく貢献できるものと確信している。そういう意味において、論文情報をはじめそれに係る情報のネットワーク化がいつそ進んでいくことを願っている。

大学院修了後二十八年間、実践を支えつづけてくれた、あの二年間の研修に今、心から感謝するばかりである。

## 支部紹介シリーズ5

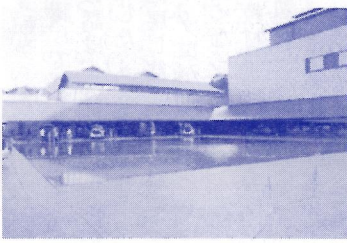
### 益田支部の紹介と活動

益田支部長 柳井 秀雄

益田支部は、益田市・鹿足郡に勤務している教員及び退職者で構成しています。現在、会員数二十四名で、その内訳は、現職十九名、現職教員で内留中の者一名、現職を退かれた方四名です。会員の多くは、管内、各校のリーダーまたは中核として活躍しているところ です。

支部の活動としては、特にこれまで、一回が会して何かなうといった活動はなく、紹介することができないことが残念です。ただ言えることは、私の記憶にある中では、島根県支部の総会が益田であるときには、皆が結束してやろうという団結力がある集団であるということです。この総会を機に支部の活性化が図られればよいと思っております。

さて、平成二十二年度は益田支部が島根県支部の総会を担当することになりました。益田での開催は、今回で四回目となります。具体的なことについては、まだ、煮詰め



ではおりませんが、一月二十八日に三役で準備会を持ち、八月月上旬に益田を会場にして行なうことにしました。講師等の関係で詳しいことは、決定次第ご案内いたします。

夏には、ぜひたぐさんの方に島根県の西の端、歌の聖と画の聖で有名な益田市にきちやんさい。



## 編集後記

今回の会報の発行にあたりまして、お忙しい中、原稿を提供して頂いた会員の皆様に感謝します。ありがとうございました。

今年度の支部総会は、紙面の紹介とおり益田ブロッックです。詳しい日時は、決まり次第支部から皆さんに案内されます。

松江支部総会では、大変勉強させて頂きました。ブロッック長の勝田先生や事務局の毛利先生にも大変お世話になりました。松江支部ならではのアカデミックな大会になって感謝しております。

さて、今回の広報には、「派遣教員を励ます会」が掲載されてません。修了生の皆様のお力をお借りして、兵教大大学院の素晴らしさを後輩へ伝えていきたいと思っております。

同窓会の原稿や会費のことで問い合わせが必要な場合は、左記までご連絡ください。

斐川町立斐川西中学校 岡田 昭彦